【二〇三高地】（爾霊山）

旅順要塞守備のロシア軍は、第二回攻撃以後、防禦施設の新設・修復に大いに心血を注いだ。とくに二〇三高地方面を重要視して防備を格段に強化した。十一月中旬の守備兵力は、兵員３万７０２８名、砲６３８門、機関銃３４梃などであったが、要塞内の糧食不足は深刻で、週四回、わずかな馬肉が配給される状態だった。栄養障害による壊血病や病気で倒れる者も多く、戦傷者の回復もはかどらなかった。

十一月二十三日午前十一時、乃木軍司令官は**第三回総攻撃**を命じた。主目標はあくまで**松樹山・二竜山・東鶏冠山北の各堡塁**であった。この要塞群を陥落させれば、旅順攻略は容易であるという乃木軍司令官の信念は変わらなかった。

各師団は攻城砲兵の援護下に一斉に突撃を開始した。東鶏冠山砲台中腹の散兵壕に突進した第十一師団の志岐少佐率いる第十二連隊第三大隊は、散兵壕を占拠したものの凄まじいロシア軍の逆襲をうけて後退。その後、数度繰り返した突撃も待ち構えるロシア軍守備隊に跳ね返されて、散兵壕の占拠はならなかった。

第一師団の渡辺大佐の率いる歩兵第二連隊・工兵第一大隊・砲兵一小隊・４７ミリ速射砲・機関砲５門からなる部隊は、松樹山堡塁を攻撃。爆薬を堡塁に投入し、機関砲の援護のなかを第一突撃隊が突入し、胸墻を登るや、第二突撃隊も突進した。その時、堡塁の咽喉部に赤旗がひるがえり、それを合図に敵兵が姿を現わし、爆薬を投げつけて猛然と反撃してきた。また、椅子山・小案子山や近辺の陣地から集中砲火をあび、死傷者が続出。なおも新たな突撃隊を前進させたが、そのほとんどが死傷した。

松村第一師団長は「第九師団が二竜山へ向かって前進を開始した。松樹山堡塁を射撃している２８センチ榴弾砲は、攻撃隊前進の時は射程を遠くすることになっている。したがって突撃の遅延は許されない。全滅を賭して一挙に堡塁内部へ突入せよ」と命じた。渡辺大佐は再度の堡塁突入を決行したが、突撃部隊は各堡塁の銃砲火・守備隊の投げる手榴弾・爆薬によって前進ならず、もとの攻撃陣地に引き返した。

再度の攻撃の不成功を知った松村師団長は、三回目の突撃を命じた。しかし、これもロシア陣地からの猛烈な砲火・小銃・機関銃の射撃の前に屍の山を築いた。

●白襷隊の奇襲

乃木軍司令官は、二十六日午後五時、各師団の突撃がことごとく失敗し、一時占拠した東鶏冠山砲台中腹の散兵壕までもロシア軍に奪還され、各方面の損害が甚大であることを報された。この戦況を打開するには特別支隊（３１００名）を編成し、決死の一大夜襲を行なうほかはないと決意。これが有名な〝**白襷隊**〟である。

白襷隊は夜八時五十分、松樹山砲台前の散兵壕へ猛然と突入し、守備兵と白兵戦を開始する。たちまち壕の内外の地雷が爆発し、一面は硝煙と爆音に包まれた。ロシア兵は態勢を立てなおして反撃した。だが、突撃隊の後続部隊は地雷・手榴弾の爆発で前進できず、突出した突撃隊は死傷者続出。やっと前進した後続部隊もロシア兵の猛射をあびて多くの損害を出し、繰り返した突撃もついに効果はなかった。奇襲攻撃も成功を期待できず、乃木軍司令官は二十七日午前二時三十分、特別支隊に退却を命じた。

同日、乃木軍司令官は攻城砲兵に砲撃の続行を命じた後、今後の作戦を検討。ついに要塞正面攻撃を一時中止し、全力をもって爾霊山（２０３高地）を奪って、旅順港のロシア艦隊を絶滅することを決断した。

爾霊山攻撃は攻城砲兵の２８センチ榴弾砲の効果が著しかった。正面防禦線の永久堡塁とはちがって、急遽構築したロシア軍陣地は２８センチ砲の巨弾によって、その大部分が破壊された。日本軍はすべてを爾霊山へ向けた。ロシア軍も爾霊山の重要性を認め、守備兵を増加し、持てる火力を集中して待ち構えていた。

二十八日午前八時、第一師団右翼隊の後備歩兵第十五連隊香月中佐の第一・第二両大隊は爾霊山へ向かって突撃した。ロシア軍の猛反撃のなか、突撃隊は全力をふりしぼって突進、ついに山頂西南部一帯を占拠した。しかし、ロシア軍の増援隊が爾霊山南斜面を登って山頂に到着、同時に付近の砲台・堡塁の砲火が山頂の日本軍に集中した。

日本軍は山頂から駆逐されてその屍を晒した。香月中佐は再度、突撃を繰り返し、なんとか西南部の一角を奪い、ここに防禦陣地の構築をはじめた。

爾霊山山頂東北部へ突撃した中央隊は不成功におわった。松村師団長は軍総予備隊の歩兵第二十六連隊第二大隊を中央隊に加え、馬場少将にただちに突撃するよう命じた。馬場少将は歩兵第一連隊・第十五連隊第一・第三中隊を加え、爾霊山山頂東北部をめがけて突進した。だが、ロシア軍の銃火と手榴弾で、突撃隊の全員が死傷という大損害をうけて失敗した。

当時、爾霊山一帯のロシア軍は、トレチャコフ大佐の率いる前進陣地守備隊で、爾霊山には守備兵５１６名、老虎溝山には守備兵９７７名がおかれていた。二十六日以降、日本軍の攻撃が爾霊山に集中されると、ロシア軍北正面指揮官セミョノフ大佐はことの重大性をさとり、爾霊山とその付近へ増援軍を続々と送り込んだ。増援隊の到着で勢いを得たロシア軍は西南山頂一角を占拠している日本軍に猛烈な逆襲をかけてきた。香月中佐の突撃隊の第一線は全滅したが、かろうじて陣地は死守した。

爾霊山の争奪に一進一退を繰り広げる状況に、乃木軍司令官は軍総予備の第七師団を爾霊山攻略に投入し、なお必要ならば第九、第十一師団からも二、三大隊を割いてこれにあてることを決意した。これは満州軍総司令官大山元帥の意向でもあり、乃木軍司令官は二十九日、第一、第七両師団長に伝えて、第七師団長大迫中将に統一指揮を命じた。

大迫中将は突撃を三十日午前十時と定め、各部隊に攻撃路の補強、前方の鉄条網の破壊など突撃準備を進めた。三十日午前六時、２８センチ榴弾砲陣地は爾霊山に向かって激烈な砲撃を開始。野戦重砲連隊、各攻城砲兵もこれに続いて砲撃を始めた。火を吹く火砲の数百三十門。爾霊山・老虎溝山は全山爆煙に包まれた。

十二月一日から四日にかけての間、爾霊山争奪をめぐって日露両軍は凄絶な死闘を繰り広げた。日本軍は指揮をとる大隊長はじめ将校が次々と戦死、むろん兵士の死傷者もおびただしかった。五日、大迫師団長は爾霊山西南一部からの進出と、歩兵第二十五連隊隊長渡辺大佐に東北部山頂方面の攻撃を厳命し、増援隊をつぎつぎと送って、ついに午後二時二十分、東北山頂一帯の占領に成功した。しかし、ロシア軍は容易に退こうとせず、逆襲に転じてきたが、渡辺大佐は新しく到着した増援隊の力をもって、山頂一帯を確保した。

その夜、ロシア軍の逆襲に備えたが、その動きはなく、五日夜、爾霊山の大勢がきまるとロシア軍の戦意は急に衰えを見せた。爾霊山・老虎溝山・化頭溝山・三里橋のロシア軍守備隊は続々と要塞本陣へ退却し、六日午後には、これら要地を完全に占領し、ここに爾霊山は陥落したのである。

第三回総攻撃（１１月２６日～１２月６日）

【日本軍】		【ロシア軍】
歩兵５８大隊	参加兵力	歩兵約３１大隊
騎兵５中隊		騎兵１中隊
工兵１７中隊		工兵４中隊
野砲　１８０門		重砲　１３２門
攻城砲　２０６門		軽砲　４４２門
その他火砲　４０門		機関銃　３４梃
機関砲　７３門		
約６万４０００名	戦闘総員	約３万１７００名
５０５２名	戦死者	＊死傷者　約４０００名
１万６９３６名	戦傷者	

●爾霊山山頂を占領すると同時に、旅順港内砲撃の準備に着手。観測所を設置して、港内の旅順艦隊へ砲撃を開始し、戦艦ペレスウェト、ボルタワなど旅順艦隊は日本軍砲撃の餌食とされ全滅した。以降、多大な犠牲を生ずる旅順要塞の正面防禦線を強襲する必要はなく、余裕をもって攻撃準備を進めた。まず、第十一師団方面では、十二月十八日、これまでさんざん苦しめられた東鶏冠山北堡塁を占領。同じく二十八日、第九師団が難攻不落の二竜山堡塁を攻め続けて、翌日早朝、これも完全占領した。

ロシア軍は二竜山堡塁陥落で、まったく士気を失った。ステッセル中将はじめ旅順要塞の首脳陣内ではまだ防禦継続説が大勢を占めていたが、同三十一日、第一師団が松樹山堡塁を占領し、それに連なる盤竜山砲台・望台・東鶏冠山砲台などの要地が次々と日本軍の手に落ちると、さすがの剛将ステッセル中将も開城を決意せざるを得なかった。

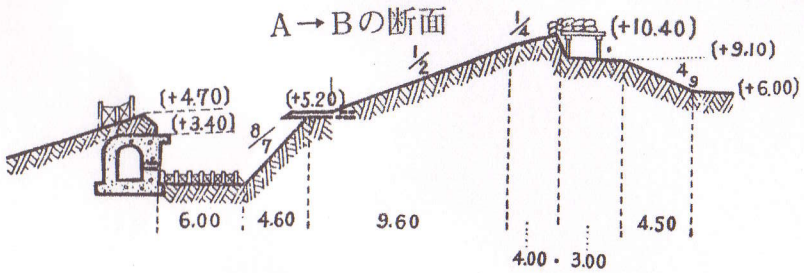
明治三十八年一月一日、ロシア軍軍使が乃木軍司令官宛の書簡を携えて、日本軍陣地を訪れ、ここに旅順要塞は開城となった。

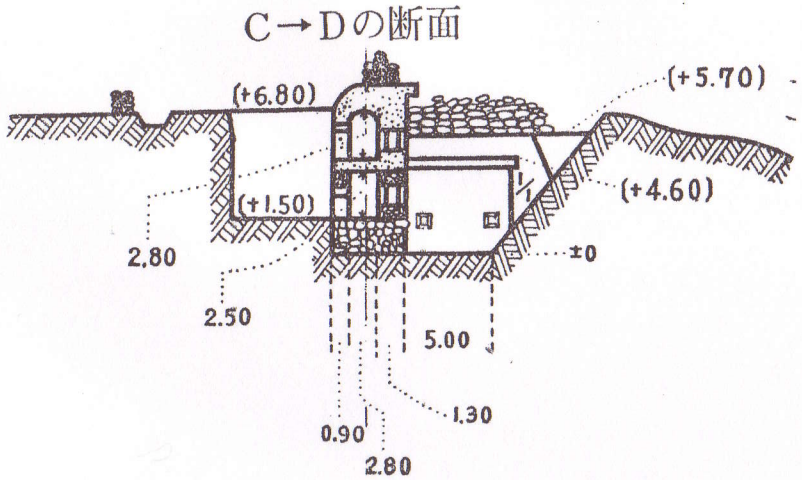
●旅順第三回総攻撃で、**第七師団がもっとも死傷者**を出した。『戦役統計』によれば、戦闘参加兵力１０４０８名の内、戦死者１１４２名（対兵力比１１％）、死傷者４８１３名（対兵力比４６・２％）。わずか１１日間の戦闘被害である。なお、『戦役統計』では第三回総攻撃の戦闘参加兵力は５１７５２名、戦死者２８６５名（対兵力比５・５％）となっている。参加兵力の１１％の戦死は、その後の奉天会戦での第九師団戦死者の対兵力比の１０・３％よりも高い。

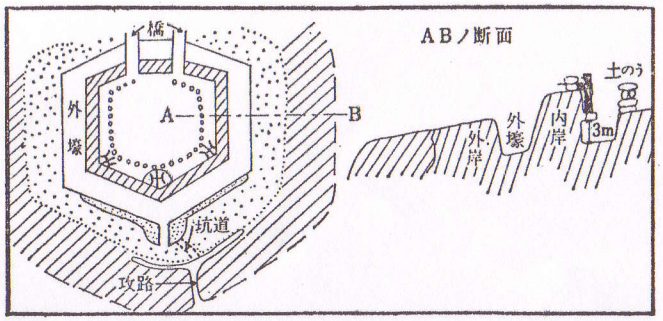
●第十一師団の第一回～第三回旅順総攻撃における参加下士卒数と死傷者数。

動員完結時	１２８５９名	１００％	
第一回	１１２００名	８７％	死傷３８４７名（戦死１７０１）
第二回	８８７０名	６９％	死傷１４００名（戦死６０７）
第三回	７３８３名	５７％	死傷２３０６名（戦死９０３）

第三回総攻撃では６割以下の戦力に落ちていた。その後、補充があって７１％まで戻ったが、奉天会戦で死傷者２７５５を出し、５０％に落ち込んだ。

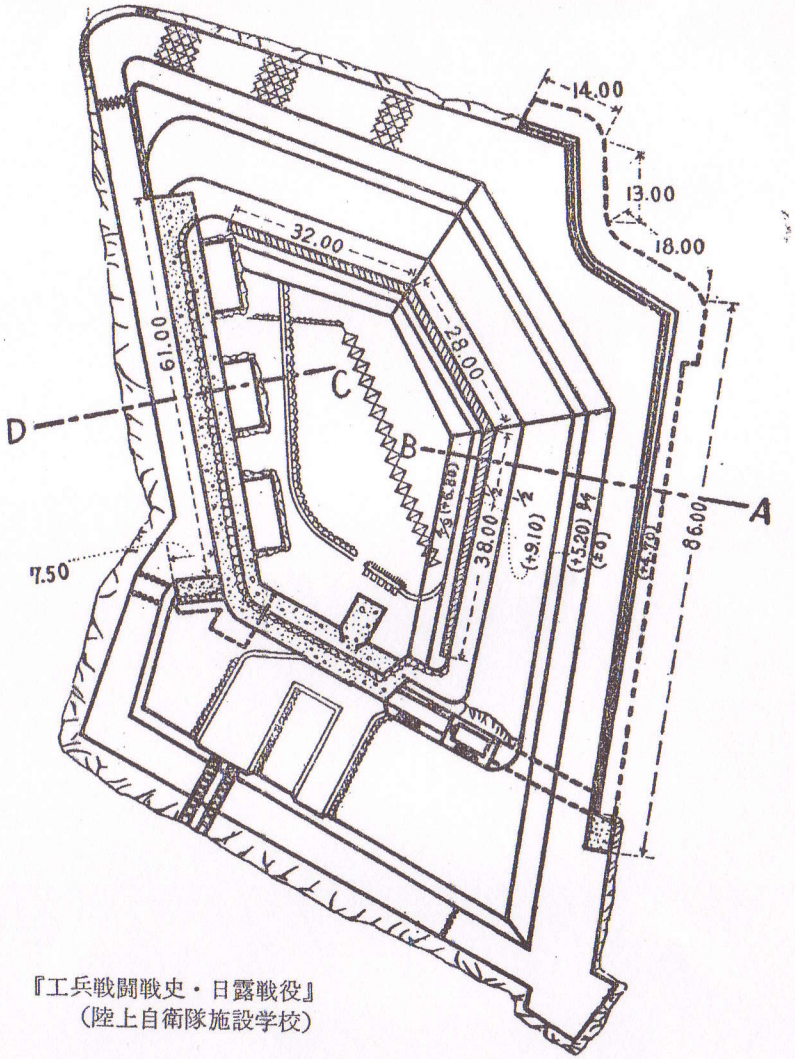






第11師団参謀部の同堡塁想像図（10月末ごろ）

東鶏冠山北堡塁図



『工兵戦闘戦史・日露戦役』
（陸上自衛隊施設学校）